

卒業論文

。時期は分
。共通性

東京大学における男女共学の実現
—女子学生はどのような存在であったのか—

総合教育科学科

基礎教育学専修 基礎教育学コース

伊藤 さゆり

東京大学における男女共学の実現

—女子学生はどのような存在であったのか—

序章

- 第1節 問題関心
- 第2節 先行研究
- 第3節 対象と方法
- 第4節 章構成

第1章 東京大学の女性への門戸開放

- 第1節 戦前における門戸開放への動き
- 第2節 占領期における男女共学化

第2章 記録にみる学生生活

- 第1節 入学式
- 第2節 男性からみた女子学生
- 第3節 女子学生からみた「大学」

第3章 回想からみる女子学生

- 第1節 藤田晴子
- 第2節 中根千枝
- 第3節 広田寿子
- 第4節 赤松良子

終章

序章

第1節 問題関心

1946年5月1日、本郷キャンパスで行われた東京帝国大学の入学式には、「面映さうに一箇所に固まる」¹若い女性たちの姿があった。この年に入学した女子は19名。東京帝国大学が迎えた初めての女子新入生であった。これは、それまで女性にとって縁遠い存在であった「大学」が、戦後の復興の中で女性への門戸を開いたことの象徴ともいえる出来事である。出来事だけではない。初めて「東大女子」の肩書を持った彼女たちもまた、時代の象徴と言えるのではないだろうか。「敗戦の悲惨と暗黒の中に、国民は挙げて虚脱迷混の状態を続けている時」²に日本の最高学府の門をくぐったパイオニアとも言うべき女子学生はどのような思いで学生生活を送り、そして社会のなかでどのような存在であったのか。本稿はそれを明らかにすることを目的とする。

現在、東京大学に在籍する女子学生は2584名³。全体の18.4%を占める。まだまだマイノリティと言わざるを得ないが⁴、1946年に初めての「東大女子」が入学してから60年以上の歳月を経て、約15000名もの「東大女子」が社会へと巣立っていった。しかし、「東大女子」に対する世間の見方はまだまだ物珍しげだ。それを執筆者自身で意識したことが本稿の端緒でもある。

第2節 先行研究

戦後改革期における女性の大学教育機会の制度化に関する研究は近年盛んに行われているようだ。その視点は多岐に及んでおり、中でもCI&E（民間情報教育局）の女子教育を担当したルル・ホームズの役割に焦点をあてたもの⁵、日本側の女子教育界の女性リーダーに焦点をあてたもの⁶など、女子大学の設立に関するものが多い。女子大学の創立運動は、アメリカの代表としてCI&Eのルル・ホームズやアイリーン・ドノヴァン、日本の代表として津田塾専門学校校長の星野あいらを中心として「女子大学連盟」や「日本大学婦人協会（JAUW）」が設立され、これらの団体による女子専門学校の大学昇格運動として位置付けることができる。これらの研究は、政府との関わりや運動の代表者の視点に立った研究が主であるため、教育を受ける側の女子学生について触れられることはほとんどない。男女共学の新制度に焦点をあてたものとしては、高橋美恵子によってまとめられたものがあり⁷、当時の男女共学化が目指した「平等観」の形成は現代にもつながると、今後の教育に課題を投げかけている。高等教育における男女共学制度の確立過程を詳細にみているものとし

ては、湯川次義が詳しい⁸。しかしこれは GHQ や文部省の対応に焦点を当てたうえで、全国の大学の動向をさらう形式をとっており、さらには前述の CI&E のホームズらによる女子大学設立に向けた動きまで考察しているため、大学の中の実態をうかがい知ることは出来ない。個別の大学に焦点を絞ったものとしては、これも湯川次義によって早稲田大学の事例が研究されている⁹。早稲田大学は東京大学と同時期の 1921 年から女子聴講生を受け入れており、1939 年には学部学生としての女性の入学を許可している。これは、他の総合大学では例を見ない全学部の解放という点で注目すべき出来事であった。しかし、湯川の研究は文部省に残された資料を検討する形をとっているため、女子学生の実態、彼女たち本人の意識をうかがい知ることはできない。東京大学については、湯川らの論文の中に言及があるものの、個別の大学として、男女共学への変遷をみるものではなく、女子学生の入学については、歴史の 1 ページとして語られているにすぎない。本稿は、その 1 ページの中に生きる女子学生の姿や意識をさぐる初めての試みといえよう。

第 3 節 対象と方法

対象とするのは、旧制の東京帝国大学¹⁰に入学した女子生徒、つまり 1946 年から 49 年¹¹の間に入学した女子生徒とする。旧制は教養課程がなく、3 年間で卒業となるため、基本的に彼女たちが在籍したのは 1951 年までとなる。東大女子卒業生の同窓会である「さつき会」は、独自の調査の中で、卒業生を 3 つの世代に分けている。その最も古い世代は 1949 年～1964 年の卒業生であり、「戦前から戦中にかけて生まれ、戦後の混乱期を経験しながら、その中で、男女平等をうたった新憲法を手にし、家庭、教育、政治などの場における女性の地位向上に明るい希望を持った人たち」¹²としているが、この中においても 49 年の新制大学への移行、53 年の女子限定である医学部衛生看護学科の設立などを経て、女子学生の様相も少なからず変化しているのではないだろうかと考えた。53 年は、共学となった新制高校の卒業生が初めて大学入試を迎える年であり、看護学科の新設と相まって駒場には女子学生が前年よりも 30 名ほど多く入学している。また、52 年、新制の 4 期生として入学した樋口恵子は、さつき会の開催した座談会の中で、自らを「もはや戦後ではない」時代の学生だといい、「もしかしたら私が、ペンダント型のイヤリングをぶら下げて歩きたいいちばん最初的女子学生がもしれません」と話している¹³。以上のことから、新制大学に移行してからは、少ないながらも先輩や友達に「東大女子」が存在し、外見にも気を遣う、現代の学生とさほど変わらない姿が見受けられることが推察される。本論文で対象とするの

は、そのさらに前、真の「パイオニア」たちの姿である。

方法については、大学史や先行研究、当時の帝国大学新聞など各種新聞・雑誌記事、彼女たちが在学中や後の人生の中で述べたものをまとめる形をとっている。本来は複数人に対してインタビューを行うことを想定して、さつき会や東京大学の卒業生室に当たってみたものの、対象となる女性の絶対数が少ないことや、個人情報の壁もあり、紹介にはいたらなかった。さらに、学士会の同窓会名簿にもあたってみたが、うまく見つけることができなかった。そのため、インタビューを行うことができたのはただ一人である。このインタビューは、本論に直接の引用はないものの、当時の時代背景をしり、本論のイメージをつくるうえで欠かすことのできないものであった。また、彼女たちの声を知ることができる当時の新聞や雑誌についても、その多くは占領期のプランゲ文庫として保管されており、豊富に残されているわけではないため、本論はそれらをつなぎ合わせて彼女たちの姿や東京大学における男女共学の実態を推論するにとどまっている。そのため、本論で述べられることは、あくまでも史料の範囲内で女子学生の一部の姿を再構成したという限界を含むものであることを、ここであらかじめ断っておきたい。

第4節 章構成

まず第1章では1946年に東京大学が女子に門戸を開放するまでの歴史を概観する。これは大きく戦前と戦後に分けてみる事が出来る。戦前における帝国大学の女性への開放といえは1913年（大正2年）に東北帝国大学が初めて女子の入学を正式に認めたことが有名であるが¹⁴、東大においても全く女子入学の声が聞かれなかったわけではない。東京大学に入学を志願する最初の女子は1885（明治18）年に既に存在した。さらに1917（大正6）年には文科大学での「夏期公開講座」に女性の受講が認められ、1920（大正9）年には「聴講生」として女性に門戸を開放している。そして終戦を迎え、GHQによる改革のもとで「女子教育刷新要綱」（1945年12月4日）が閣議諒解され、東京帝国大学が女子学生を正規の形で迎える行政的措置が準備された。これに対し、実際にどれだけの女性が東京帝国大学を志望し、合格し、入学したか、そして彼女たちについてどのような記録が残されているかをまとめる。

第2章では、第1章でみた時代的背景をうけて入学した東大の女子学生の学生生活を様々な観点からみていく。まずは、学生にとって特別な日である入学式。現在でも東京大学の入学式の日夕方ニュースで、その様子を伝える武道館の映像が流れる。特に冒頭で述

べた 1946 年 5 月 1 日の入学式は学生にとっても大学にとっても、そして社会にとっても特別な意味を持ったはずである。そして、女子学生たちは同じ教室で学ぶ男子学生や教壇で教える教員からどのように見えていたのかを探る。さらに、女子学生からみた大学生活を『帝国大学新聞』や各種新聞雑誌・記事に寄せられた文章などからみる。そこにギャップはあるのだろうか。彼女たちはどんな存在だったのか。

続く第 3 章では、実際にパイオニアとして東京大学に入学した女性がどのような学生生活を送っていたかを、4 人の卒業生をとりあげて彼女たちが後に著したものに寄せている文章をもとに詳細に探っていく。彼女たちはなぜ東京大学を志望したのか、どんなことに苦労したのか、そして、東京大学を卒業する時にどのような進路を選択していったのか。第 1 期の藤田晴子、第 2 期の中根千枝、広田寿子、そして旧制最後となる第 4 期からは赤松良子の回想を主に取り上げる。

そして終章では第 1 章から第 3 章をうけて、女性に開かれたばかりの東京大学に通った女子学生たちがどのような存在であったのかを検討する。

第1章 東京大学の女性への門戸開放

第1節 戦前における門戸開放への動き

東京大学の評議会が女子への門戸開放について正式に議論したもっとも古い記録は、明治23年7月1日のものである。

婦人入学ニツキテノ件 右ハ入学ヲ許サザル事¹⁵

たった一言のそっけない記事であり、何がこの議論の引き金になったかは定かではないが、確かにこれ以前に東京大学（当時は帝国大学と名称を改める前であった）への入学を志願する女性は存在した。それが奈良県吉野に医師の次女として生まれた木村秀子である¹⁶。秀子は1885年、数回にわたって東京大学に願書を出したが、前例がないことを理由に許されなかった。その後文部大臣森有礼に直訴し、結果的にようやく1887年に医科大学の選科生¹⁷として入学を許可された。朝日新聞は「是実に吾邦女子の大学入校志願のはじめなるべし」と伝えている¹⁸。秀子は、「男子にも及ばぬ氣象」をもち、常日頃から「我邦男尊女卑の弊あるは女子に独立の産業なきに因る我身誓つてその先導者たらん」というようなことを人に語っていたという¹⁹。

この後、学問を志す女性に対し東京帝国大学の門が緩んだのは1917年（大正6年）のことである。文科大学（後の文学部）が「夏期公開講座」を開講して女子の受講を認めた。女子は全体の約1割を占め、博士夫人、文芸家、教員などあらゆる知識階級の女性が出席していたようである。同大学教授桑木巖翼は「學術の普及を計る上からは男女を問わず希望の向は喜んでこれを歓迎する次第である」と述べており²⁰、読売新聞は「婦人界は一種の驚異ご興味とを之に対して感ぜずにはいられない」²¹と報じ、「赤門日参の記」と題して公開講座に最年少（17歳10ヶ月）で参加した女性の手記²²を掲載している。手記によると、講義は男女別席で行われ、天気の良い日などには貴婦人たちの自家用車が早くから正門前に並んだという。また女性の年齢は上は50代から下は17歳まで幅広くおり、興味深いことには、あの人は津田、あの人は女子師範、というようになんとなく雰囲気出身校が見分けられたそうである。

文科大学に続き、1920年（大正9年）には正式に聴講生を受け入れることが以下の規定のもとで認められた。ただし、聴講生は選科生と違い、文字通り聴講することだけしか許されなかった。

第31条 各学部ノ学科科目ニ就キ聴講ヲ志願スル者アルトキハ各学部ニ於テ学生ノ学
ニ妨ナキ限リ聴講生トシテ之ヲ許可スルコトヲ得
聴講ハ学期又ハ学年毎ニ之ヲ許可ス

第32条 聴講生ハ各学部所定ノ資格アル者ニ限ル但シ官庁又ハ外国政府ノ委託アル
トキハ此ノ限ニ存ラス

第33条 聴講生ニ対シテハ試験ヲ行ワス²³

「女子」という明記はないものの、これは女性の聴講を認めるという判断に基づいて創設された規定であることに歴史的意義を持つ。これまでは、女子高等師範学校の卒業生などで、学校から学校へと委託されて研究する人を聴講生として受け入れていたのが²⁴、学部
の求める資格さえあれば自由に志願することが可能になったのである²⁵。

こうして、東京帝国大学は女性に開かれつつあった。男子生徒からは、生意気だとか、
わかりもしないくせに学問を鼻にかけるとか、あるいは聴講の態度が不真面目であるなど
という批判もあったようだが、それに対して東大教授の松本亦太郎はいつの世でも最初の
人たちは批判の犠牲となるものであるし、女子聴講生は非常に熱心であるので、とにかく
明るい未来が期待できるということを述べている²⁶。

しかしその後、学力の不足からか、家の仕事に忙殺されてか、女子学生は徐々に欠席が
ちになる²⁷。文学部をみると、最初の年には200名以上いたのに、その後150名となり、
100名前後となり、1926年には82名、27年には45名という激減振りであったそう²⁸。
そしてついに、1928年度から女子の聴講生はキャンパスから姿を消すこととなった。これ
に対して文学部の教授は次のように語っている。

前にも大分問題になつたが、実は来年度から文学部の収容定員に100名の増加があつ
たため毎年百五六十名を傍系から募集して入学せしめていたが高校卒業生の入学者が
年に増加の傾向なので、お気の毒ながら来年度からお断りすることに決めた。²⁹

この後、赤門をくぐる女子学生の姿が見られるようになるには終戦を待たなければなら
なかった。

第2節 占領期における男女共学化

前述のように、戦前における門戸開放は、選科生や聴講生として女性が講義を受けることを認めるという、「男性」大学が個別に門戸を開く制約的なものであった。それに対して、戦後には女性への教育機会均等が国家の政策として推進され、制度として確立した。その中でも特に、戦前に門戸を閉ざし続けていた東京帝国大学が1946年に初めて女子入学者を受け入れたことは、機会均等の象徴とも言えるべき出来事であり、それを受けて女子の入学を認める大学が相次いだ。

この機会均等の背景にはGHQの司令官マッカーサーによる「人権確保の5大改革」(1945年10月11日)の中の「婦人の政治的解放」の方針がある。これをうけて、文部省は1945年12月4日に「女子教育刷新要綱」を閣議諒解した。これは大学における男女共学、高等教育機会への女性への開放を含むものであり、東京帝国大学が正式な制度として女性を受け入れる体制を整える基盤ができたことを意味している。1947年に経済学部に入学者の広田寿子は、この知らせに「目からウロコが落ちるほどの感激」を味わったという³⁰。

帝国大学内部ではこの戦後の動乱の中で、女性への大学開放についてどのような声があったのか。昭和20年11月1日付の『帝国大学新聞』の中で、東大法学部の卒業生でもある社会運動家高野岩三郎は、「大学の婦人への開放は・・・大学民主化実施の方法であり、東北帝大に先立ち、東大経済学部女子聴講生を迎えたことを持ち出して、「今はただこれを普遍的に行ふか否かの差にすぎない」と述べている³¹。

そして文部省は翌2月21日に「昭和21年度大学入学者選抜要綱」を発した。ここでは、入学者選抜試験の期日、方法、出願手続きが示されたが、注目すべきは志願者の資格である。従来の高等学校高等科卒業者、大学予科修了者に加え、男女専門学校卒業者や高等学校高等科卒業者、女子高等師範学校卒業者などまで、広く門戸を開放していたのだ。この文部省の動向を受けて東京帝国大学は2月初旬には入学試験に関して男女専門学校卒業者などにも入学資格を与えることを決めている。当時の東大事務局長は選抜要綱の発表に対して「もし女子を収容するとすれば本校の定員は高校卒業者ですでに一杯になっているからこれと別に「定員外」を募集したらどうかと思う。もちろん正式な議題にはあがないない」と述べており³²、必ずしも学内が積極的な姿勢だったとは言えないようである。では、このような状況下で実際に女子はどのように入学してきたのだろうか。

昭和21年度、女子の全志願者は108名。内訳としては法学部に16名、医学部に12名、文学部に49名、理学部に17名、農学部5名、経済学部9名である。そのうちの合格

者は19名。内訳は法学部4名、医学部1名、文学部8名、理学部1名、経済学部3名であった³³。この合格率は17.6%で、男子専門学校卒業者の9.7%よりもはるかに高く、入学成績にしても、法学部では4人中3人が上位7%以内に入り、経済学部では3人中2人が上位約36%以内、文学部では8人中3人が上位32%以内という状況であり³⁴、女子の学力が同程度の学歴をもつ男子に比べて全く劣っていなかったといえる。ただし、執筆者が唯一インタビューを行った、第2期生の女性によると、採点が男女別だったというのを聞いたことがある、という。真偽のほどは定かではないが、もしそれが真実だった場合はこの数字の観方も変わってくるであろう。この中には当時すでにピアニストとして活躍していた藤田晴子も含まれていた。また、志願者の学歴内訳としては、女子高等師範学校11名、女子師範学校専攻科1名、私立大学女子部4名、私立女子専門学校及び私立大学専門部88名、官公私立高等女学校専攻科及び高等科5名とさまざまであった。さらに学校ごとにみると、東京女子大学（25名）、津田塾専門学校（12名）、帝国女子理学専門学校（12名）、東京女子高等師範学校（11名）などの学歴を持つものが多く、合格者のほとんどもこれらの学校に集中していたようである³⁵。

以上のような男女共学の実施に対して、文部省は東京帝国大学に対ししばしば女子学生についての報告を求めている。この背景には、当時のCI&E次長の文書に資料として、東京帝国大学をはじめとする7帝大の女子入学に関する調査報告をまとめたものがのこっていることから、GHQの大学への女子入学に関する強い関心があったものと推測されている³⁶。

そのひとつに1946年11月の「女子学生に関する概況」がある。

女子学生に関する概況（東京帝国大学文学部）

一、女子の入学に対する一般的感想

- 1、概ね態度厳正なり、成績亦概して優良にして研鑽、勉勵しあるを認む
- 2、一般に快活明朗、学生相互の疎通良好なるものを認む

二、女子学生に対する厚生補導の対策

- 1、当学部内に設けある就職相談部の利用を女子学生に対しても有効適切ならしめ現下食糧其の他の事情に対処せしめ之が福祉を計るとともに東京帝国大学内厚生部其の他の厚生施設との連絡をも密にし、本人の希望に応じ、種々厚生補導をなす。

三、其の他女子学生に関する概況

- 1、思想状況に於いては顕著（過激、驕傲）なるものあるを認めず。
- 2、保健に関しては概ね健全にして欠席者なく良好なり。
- 3、生活状況に於いては一般に中流なるものと認む。³⁷

この他、法学部では試験が行われていないため、「その能力を調査することもできない」としつつ、「一般に授業に対する態度は熱心であり出席率もよくその点男子学生に伍して劣らずよく勉強している」という回答が得られている。また、農学部は、男子学生への影響について、「男子一般学生は却て向上心が増すようにも感じられる」、女子学生の存在は、すでに女性職員が多く実験室で勤務している事情もあってか、「特に奇異のことにも一般には思っていない」としている。ここまでは総じて男女共学を評価するような受け止め方が感じられる一方で、経済学部は「一、二、三共になし」と記しただけだったというように、女子学生に対し積極的な配慮が必要という認識がそれほど高くはなかったという一面もあるようだ。

以上のように、東京大学で学びたいと思う女性は明治から存在したが、現実には門戸が開放されるまでは長い年月を要した。しかもそれは大学側や、教育者たちが高等教育における男女共学の重要性を訴えて積極的に実現したものでも、あるいは女性自らが勝ち取った権利でもなく、いわば時代の流れの中での、制度的な実現であった。しかし、そんな中でも日本の最高学府である東京大学を志願した 100 人を超える女性たちは、自らも学問への憧れと希望を抱くとともに、世の若い女性の学問に対する希望をも代弁する存在だったのではないだろうか。

第2章 記録にみる学生生活

第2章では、第1章でみてきた過程を経て、入学を許された東京大学の女子学生がどのような学生生活を送り、何を感じていたのか、そしてそれは周囲にはどのようにうつっていたのかを、『帝国大学新聞』や当時の雑誌、新聞記事をもとに見ていく。

第1節 入学式

東大女性第1期合格者19名は、冒頭で述べたように1946年5月1日に入学式を迎え、多くの男性にまじって、晴れて「東大女子」となった。この入学式における訓示の中で、南原総長は次のように述べている。

今回女子の新入生を迎えたことは喜びに堪えない。これは本年わが国に初めて実現せられた婦人参政権とともに、画期的事件といわなければならぬ。約20名の少数とは雖も、諸子よく日本女性の美德を失わず、しかも男子学生に立ちまじって、いかに大学教育を修得するかは、日本女子教育の将来をトするものとして、世の注視するところであらう。³⁸

この訓示によって女子学生の存在は全学生の意識するところとなった³⁹。

この時の様子を『帝国大学新聞』は「女子学生は流石に面映ゆさうに一箇所にかたまる」「色とりどり華やかなただしあまり美しくはない女子学徒」という表現を用いて報じており、大勢の男子学生の中にちらほらとみえる若い女性を物珍しげにとらえる記者の様子が伝わってくるようである⁴⁰。

1948年の『帝国大学新聞』の記事には入学式を終えた「女子学生」⁴¹に対するインタビューがのせられているが、そこで彼女は「(南原総長の訓示について) 入学式訓示としてはそれらしくていいのでしょう。アカデミズム学者としてこういう話は当然のことでしょうが、私たちはアカデミズムの無力を感じているのです」と述べている⁴²。

第2節 男性からみた女子学生

ごく少数の女子学生は、同じ教室の中で圧倒的多数を占める男子学生、あるいは教壇の上にいる教員の目にはどのように映っていたのだろうか。

法学部のある男子学生は、次のように語る。

なるほど彼女らは、多くの競争者との闘いに勝利したのかもしれないが、ここでいわれる闘いはそのような個人的な、たかの知れた才能の差をいうのではない。

重要なことは、彼女らの現在の地位は、彼女らが、女性として、男性の社会から闘いとったものではないということだ。

彼女らは勞せずしてこの地位を得た。⁴³

彼の言うところによると、男女共学は「与えられた解放」であり、彼女たち自身が闘って勝ち取ったものではないため、その重要性を女子学生たちは理解していないという。そのため、彼女たちが果たしうる歴史的役割には「決定的な限界」が存在するというのだ。そして、「家事と、炊事と、配給と、あらゆる家庭的煩雑と、家庭的善良さと、そして、両親の庇護とにおうれている」日常生活から解放されない限り彼女たちの存在意義には多くを期待できないと締めくくる。

また、興味深いのは次のような記述だ。

彼女らは何を求め、何を学ばんとして「大学」の存在をいかなるものと判断し批判しつつ入ってきたのだろう。彼女らは、どんな抱負と、どんな期待をもってこの門をくぐったのだろう。

彼女たちの求めるものは「家庭的道徳的善良さ」の修得か？

あるいは抽象的な自我の完成だろうか？

「教養の醇化」であるか？

「学士号」であろうか？⁴⁴

この記述には、同じ大学に通い、同じ講義を受けながら、女子学生を自らとは全く別の考えをもつ存在と否定的にとらえていることが見て取れる。そして、彼女たちを、生活の中心は学問ではなく、家事などにあり、両親のもとで何不自由なく暮らしている女性と決めつけているようでもある。

しかし、その一方である文学部の男子学生は「東大に学ぶ女性達」について次のように述べる。

私の受ける印象は先ず皆が理性的だと云ふ事、そして純粹に學問への沈潜があると云ふ事である。偏見かもしれないが、多かれ少なかれロマンチックと云ふ性格が特徴づけると考へていた女性観は學友の女性たちが漏らした抱負を聞いた瞬間、美事に覆された。・・・私たち男子の學生中には最早、男女共學という環境を特に意識している者は少ないだらう。といふ事は同學の女性を無視しているといふ輕蔑的意味はまったくなく、かえつてそれは少なくとも學問の世界に身を置く限り、男性女性の區別を考慮に入れる必要なしに相手に尊敬できるという意味に他ならない。・・・と同時にこう書いてきた事は女性的なるものの喪失を強調するためではないことも勿論である。研究室の机の上には何時も可憐な花が匂っている。その心遣いを忘れぬ人たちなのである

45

ここで彼は、共に學ぶごく限られた女子學生についての話だが、と斷りを入れているものの、当初女子學生に対し抱いていた戸惑いも消え、同等に學問を志す者として評価しているようだ。2人の男子學生の言葉から浮かんでくる女子學生の印象は大きく異なる。

教壇の上からの目としては、文學部國文科の教授が女子學生について次のように述べている。

女子の學生は全体として學問的に優秀な成果を上げている。従来の女子の學校における學習態度でみられた直感的で、実証的な手堅さの欠けていたのがここでは反省されて実証的にも堅実な方法を身につけてきているようであり、組織的体系的な把握も十分期待することができる。…これには男性の學生からの刺激もあり、また男性の大學に入学できる程の學生は優秀な學生であるからであろうとも言える。殊に女子は男性の學生に伍する場合、學問的により真劍になるようである。…おそらく卒業論文も優秀なものが出るであろうと思ふ。ただそれを卒業後も持続してゆけば學界における女性の活躍も十分期待される。⁴⁶

彼は女子學生の學力を冷静に分析し、評価している。しかし、最後の一文からは、女子は男子學生と比べて、卒業後も學問を続けないのではないかとみているのがうかがえる。

さらに、ある雑誌記事では、學友會の選挙で女子學生が最高票を獲得して當選した例や、非常に厳しいといわれている文學部の語學検定試験で、前期後期いずれもトップで合格し

たのが女子学生だった例を取り上げ「女子学生が男子学生を牛耳っている」と表現したうえで、「東大には多くの真剣な女子学生が学んでいる」と評価している。そのなかで、「あえて非難するなら」、特に1期生2期生は女学校を出ているため、年齢的にも女子学生というより雰囲気落ち着きすぎて「女子」というよりも「女史」といった学生が多いことだと述べ、「女子学生も、女史然たる雰囲気を一掃して、東大生らしい姿に帰ることが必要であろう」という⁴⁷。

限られた資料の中にも、女子学生に対する反応は様々あったことが推察される。女子学生と同じ教室で過ごす男性たちも、女性を受け入れ難く思っているもの、従来抱いていた女性像とのギャップに戸惑いつつも学問を志す同志として評価するもの、珍しげに眺めるものなど様々であった。もちろん出会った女性によってその対応も一様ではないはずだが、男子学生にとって女子学生たちは少なからず刺激的な存在であったはずである。

第3節 女子学生からみた「大学」

では、受け入れる側の男性が上記のように語る女子学生は、大学という場について、男子学生について、あるいは「男女共学」という問題について、当事者の立場から何を感じ、どのような学生生活を送っていたのだろうか。

この時期の帝国大学新聞において興味深いのは、女子学生へのインタビューをたびたび行っていることである。入学して1か月を経た新入生に対する下記のようなインタビュー記事がある。

▽文・法・経某女子学生の感想（学生生活について）

まづ第一に感じられたことは、非常に礼儀のすたれたこと、これは、特に女子学生にといふのではなくて、便所の不潔、教室内での喫煙、伝言板ならぬあちこちへの落書き等

講義の面については

教授が、必要以上にレベルを下げていてのではないかと思ひます。たとへば、「君達には文学はわからんよ、語学が精一杯だらう」などといった調子

と、ちょっぴり不満と幻滅をほのめかし、学力低下にあえぐ復員学生の襟元を寒からしめる然し「何か自分たちに欠けるものはないと思ふか」の問いに対しては

やっぱり一般的な教養と人格的な円満を欠いていると思ひます

と専門校出身の苦悩を一席、大学への希望について

女だからといって特別扱ひはされたくないが、女子寮の開設がほしい、と⁴⁸

また、「K嬢」(文、日本女子大卒)は「講義はノートを読むだけでつまりません、それにお弁当をどこで食べたらよいのかわからず一寸こまりましたワ⁴⁹」という声を寄せている。

入試を終えた学生に対するインタビューのなかでは、女子高等師範学校にかよう「早川嬢」(男子学生は～君であるのに対し女子学生には～嬢という表現が使用されているの)が、「試験問題は難問というほどでもなかった・・・女だけの大学なんてつくらず、男女共学でお互いの特性を学びあっていくほうがいいと思います」と述べている⁵⁰。

これらの短い記事の中から、入学したばかり、あるいは入学を控えた女子学生たちが問題に感じる点を大きく、大学の施設の不備について、大学での学問について、そして「男女共学」を実現させた大学そのものについて、に分けることができる。

当時は終戦直後ということもあり、まだまだ学校の施設の面でも女子学生を受け入れる準備が整っていなかった。それについては、女子学生が懇談会(「禁男の会」と報じている)を開き、衛生施設(女子トイレなど)の完備を要望、男子学生の喫煙など公衆道徳がなっていないことへの苦情、「学生同志が余りにも他人行儀であるのは輝けるこの東大の伝統か」との批判など、様々なことを話し合ったという⁵¹。このように、圧倒的に少数派であった女子学生たちは時折集まりを開いていた。3期生として1948年に入学した久留都茂子は、「法学部と経済学部は共通科目もあり、何時とはなしに、お昼休みに、中央図書館前のベンチにあつまって、お弁当を広げるようになった。…只でさえ、口八丁手八丁の女性が群れをなしては、さぞ、かしましかつたに違いない」と当時を振り返っている⁵²。

それに関連して、彼女たちは、女子学生のためのトイレット設置を当面の目標に掲げ、「女子学生の自治による学生生活の向上と親睦」をはかるための「光葉会」という組織を立ちあげる⁵³。第1回の会合は同年の夏季休暇明け、10月2日の3時半から山上会議所で開かれた⁵⁴。ここでの主な議題は、①厚生問題として翻訳などの内職を同会の会員の相互扶助のもとお互いに紹介し合おうというもの②そのために部屋を確保するための運動をすること③懇親のためにピクニックをやろうという3点であったという。また、記者が行った懇談から、人気の講義、評価方法への意見(テストよりレポートのほうがよい)、学内施設整備の要求、ピクニックをやるにも「オサンドン」(台所仕事)があつてなかなか実現しないなど、様々な意見を得ている。さらに、この席上で会員16名に対して行った生態調査か

ら、自宅生が多く、全員が何らかの内職を希望していることがわかったとの記述がある。また、学校出席率は週15時間以上で、「男子学生と比して隔段の精励ぶり」。男子学生に対しては「大変親切で満足してるもの、ともう少しエチケットを心得てほしいものと意見半ばの状態」であったようだ⁵⁵。

帝国大学新聞にみられる女子学生について述べるうえで、非常に興味深い連載がある。昭和23年2月19日付から3号にわたり、「一学生の立場から」と題し、学生の声が寄せられているのだ。その先頭を飾るのが英文科3年の江口裕子による「女子学生の立場から」である。ここでなぜ「女子学生」か。それは次号の「軍学徒の立場から」の中の以下の記述から明らかになる。

8.15 以後の日本の新しい事態は、以前には思いもよらなかった2種類の異分子に大学の門を開かせることになった。そして歓迎された1群が女子学生であり、多少迷惑がられた他の1群が軍学徒だったというのが、いつわらぬ実情であつたろう⁵⁶

では、「歓迎された」女子学生は実際のところどう感じていたのか。江口は「一部の学生の積極的な賛助と友好を除いて一般には冷静であるか無関心でありまた一部ではあまり高級ではない好奇心を抱いて女子の学生の言動をいちいち言あげして喜ぶ野次馬的存在」もなかにはいたと述べている。また、「入学当時女子学生はいずれ生活には事欠かず余裕しゃくしゃくと勉強に専心できる人たちだろうという声があちこちで聞こえた」ことに對し、大半の女子学生は男子学生と同様にいくつものアルバイトを掛け持ち勉強との両立をはかっているが、体力が男性よりも劣る点が女子学生のもっとも悩ましいことだと反論している⁵⁷。さらに、男女共学については、女子学生が全学の1%にも満たない状況では顕著な展望を見ることは困難であると述べつつも、時には女子学生がタクトをとることで議論が円滑に進み、和やかにお互いの意見を正しあう場面もみられるという。そして、「女だけの社会でも男だけの社会でも結局異様に片輪染みていて議論の余地なく偏見の育ちやすい環境に違いなく、男女は「もっとフリーに多面的に異質の人格により練磨し吸収しあう場」があるべきで、それは学校という場で「苦々しい純粋な精神と麗しい知性の交流によってつねに発見の驚異と喜びのうち」に成し遂げられるべきだ、ということ、男子と肩を並べて学問をする中で感じているという。

ここで中心に述べられているのは、東京大学という「男子大学」に女子が入学を許され

る、「男女共学」とはいかなるものであったかということである。本論が対象とする女子学生が東京大学に通った 1946 年から 5 年ほどの間、新聞や雑誌では盛んに「男女共学」について論じられた。それらの論点に共通するのは「女子学生はいったいどのような存在なのか」「男女共学はどのように実現しているか」というところであり、まさに本論が明らかにしようとしているところでもある。多くの記事が有識者や学生の座談会形式であったり、女子学生本人、あるいは教室という場で女子学生を実際に目にしている教授や学生へのインタビューという形式をとっている。そしてその中には東大の女子学生を取り上げているものも少なくない。法学部に通う 2 人の女子学生が自ら感じた「男女共学」について声を寄せている。

入学早々の頃は、なにしろ大学の講義にもなれないし、数の点で圧倒的な男子学生の中へ入って行くそのことだけで、いい加減疲れを感じました。1 年たった今静かに顧みて…いささかの成長を感じるとき…共に講義を聞く友達によりどんなにか啓発され刺激されたかを感じます。女子のみの学校では、到底得られぬと思われる物の観方、考え方、読書や思索に見られるファイト、それらは私の学問に対する憧れを強め、精進への励ましとなり考え方を広め深めてくれたことです。が、それにもまして自分が女性であるということを、女性としてのあるべき姿をはつきり認識させられたことです。

今共学の経験を通して最も有意義に思われるのは、色々な意味で女性の再認識をしたことです。…大学へ入って単調に思われる講義に「学問」を見失い始めたとき、男子学生の学究態度こそ、命を賭した戦いにも喩えうる厳しさがあって、それは女性の世界では見出しえないものでした。学問とは、人をして人たらしめるものと言われますが、真の人間たる両性の協力によるところが大でしょう。私は、男子学生に接して、新たに自己を認識したことを嬉しく思います。⁵⁸

2 人の記述に共通するのは、東京大学で学問をすることが、女子の学校でするそれとは異なる、という点である。経済学部的女子聴講生がそれを「筆記態度などにみられる、対象に向かって激しく詰め寄ろうとする迫力⁵⁹」と表現するように、直感と感情で物事を考えるとされていた女性の中だけで学問をするのと比べて、物事の捉え方も考え方も大きく違っていったようだ。女子学生の学問に対する姿勢については、経済学部的女子学生が「女子学

生はなかなか勉強しているが、研究会、組織活動には消極的すぎます、これまでの女子教育を改めない限り、女子学生の発展はのぞめません」というように⁶⁰、まだまだ男子と肩を並べて、と思うようにいかないところもあったようである。

彼女たちは男子学生の学問に対する姿勢に刺激を受けていただけではない。「男子大学」という、いわば閉ざされた空間に突如として放り込まれた彼女たちは、誰よりも間近にその実情を客観的に見ることができたのである。経済学部の特講生の女子学生は、次のように語る。

最高学府と銘打たれたあの学舎からはおよそ有機的なにじみ出るようなニュアンスが寸分も感じとれない。…学問のデパート—そう一口に言ってしまうと一応納得がいくけれども、学生の組織そのものにもっと横の連絡があってもいいのではないかしら。…現実の機能的な組織の上に打ち立てられたものから新しくフレンドシップを醸成してスクールライフを、もっと楽しむようにできないのでしょうか。…勉強態度は確かに真摯であり、…非常に羨ましく思われるのですが、社会の悩みを解きほぐしリードできるだけの実力を身につけるためには一層の奮起が望まれるのではないのでしょうか。

61

なんとも厳しい意見ではあるものの、前述の女子学生の懇談会の中でも「学生同士余りにも他人行儀である」と話されているし、第3章で登場する藤田晴子も「大学の外からみていた学生さんと大学の中に入ってみた学生さんとは相当感じが違います。今の学生さんは殺伐だと思います」と述べるように⁶²、これと似た印象は多くの女子学生が感じていたようだ。

第2章では、様々な角度から当時の東京大学の女子学生について見てきた。受け入れる男子学生や大学側としては突如自分たちの空間にあらわれた「女子学生」を様々な評価することで「男女共学」がいかなるものかを考えていたように思える。しかし、それは身近に過ごし、議論を交わした女子学生を語るのと、遠巻きに眺めていた女子学生を語るのではやはり大きく違ってくるだろう。どれだけの男子学生が女子学生と身近に過ごし、どれだけの男子学生が女子学生とほとんど言葉を交わすことなく卒業したかというところは、本稿では明らかにすることができなかった。一方で、女子学生は、「男子学生」について述べる中で「大学」という場全体を見つめていた一面があるように思える。それは、あのキ

キャンパスに生き、勉学に励む「男子学生」こそが彼女たちにとっての「大学」そのものだったからではないだろうか。

第3章 回想からみる女子学生

ここでは、東京帝国大学の女子学生として本郷キャンパスに通った4人の女性たちが後に記した回想をもとに、彼女たちがどんな思いを抱き、どのような学生生活を送っていたのかを明らかにする。雑誌、エッセイなどをみると幾人もの女性たちが当時を回想しているが、本稿では、より詳しい描写がある藤田晴子（49年法卒）、中根千枝（50年文卒）、広田寿子（51年経卒）、赤松良子（52年法卒）の声を上げる。

第1節 藤田晴子

入学前からピアニストとして活躍していた藤田晴子は、東京大学の女子学生第1期生の19名のうちの1人であった。彼女の入学は世間からも注目され、この年の法学部の合格発表を報じる『帝国大学新聞』の中には「(合格者中の) 変わり種は女子学生の中にピアニストの藤田晴子氏のいること」と報じる記事がみられる⁶³。藤田は、本郷キャンパスから徒歩5分という場所に住んでいた。よって、受験動機についても、「前々から、家が近いのに、なぜ受けさせてもらえないのかしらと不満でした。それで、受けられるようになるとすぐ、受験しました」という⁶⁴。つまり、女性に門戸が開放されたことは当然と捉えていたようである。しかし、当時の社会情勢はというと、

昭和21年と言えば、東京はまだ戦時中とほとんど変わらないような荒廃した姿をしておりまして。敗戦後第1回の入学生であった私たちは、極度に不自由な衣食住に悩まされながら生活しておりました。

私たちの入学試験の直前には、日本中のお金が封鎖されてしまいました。そして皆様ご存じのように、みんなが一律に百円ずつの紙幣を手渡されました。大学の受験料は十円でした。手の切れるような十枚の十円札の中から貴重な一枚を抜いて、パスする自身のない試験の為に献じたときの心細い気持ちを、わたくしはいまだにはっきりと覚えております⁶⁵

というように、社会全体が貧しく、大学に行くということは学力だけではなく経済的にも困難を伴うことであった。藤田自身も、

父の他界後、女3人になってしまいましたので、私は途方にくれました。ピアノの収

入があったとはいえ、それは至って不安定な収入で、いつまで続くか分からない気持ちでしたから、私は決まってサラリーのいただけるところに、どうしても就職したいと考えました⁶⁶

というように、知識や学問への欲求だけでなく、働き手を欠いた家庭の事情もあって進学を決めたようである。なお、法学部を選んだ理由については、何十科目も必要な場合がある文学部に比べ、法学部は試験科目が論文 2 つと外国語 1 ヶ国語という 2 科目だけだったから、という⁶⁷。そして、試験科目が発表されてから入試までの 1 ヶ月半の必死の勉強の末、晴れて東京帝国大学の迎える初めての女子学生となったのである。以下の文は、昭和 21 年に藤田が雑誌のインタビューに対して語ったものの抜粋である。

入学して驚いたことは、男の学生の多いこと—尤も法学部に、今年一緒に入学した学生は、300 人以上もあるのに、その中、女はたった 4 人なのですから、男の学生の「数」に圧倒されるのは、当然のことに過ぎないのですが—。折角女性に大学を開放して戴いてもこのような心細い状態では、一事が万事で、日本の文化が急速に立ち直る見込みなど、とてもないのではないかという不安が最初に先ず、強く私の胸を騒がせました。

何時かアーケードのあたりで、何事か言い争って居る 2 人の学生さんの傍を通り抜けたことがあります。その時私が、「馬鹿野郎」という言葉に驚いて、無意識に立ち止まったら、2 人の学生さんは決まり悪そうに喧嘩をやめて、笑いだしてしまいました。私は背を向けたままでしたので、2 人の顔はとうとう見ずにしまいましたが、女性というものは、ものも言わずに男性の傍らを通り抜けるだけでもこれ位の和やかな影響を残していくものらしいのです。⁶⁸

また、藤田は入学後も NHK の芸能嘱託として音楽活動を続け、試験前にはノートを「大わらわで整理して頭に詰め込んで」卒業した⁶⁹。この多忙な生活については、「そもそも勉強がしたくて大学に入ったわけですし、できることならば卒業後も研究を続けたいと思って、充分楽しみながら勉強していました」と⁷⁰、回想している。

苦労したことについては、

着るものが乏しい時代で、女学校の頃の制服をそのまま着て通っていましたから、戦場から復員して帰られた方などは、大学に帰ってみると変な女学生が教室にいて、びっくりされたらしいです。食べるものは、当時配給が少なく、麦の粉のような茶色いものを、お米の代わりに焼いていただくのですが、あまりに食糧が少ないので、大学から帰ると、あまり身体を動かさないで寝ていないと、身体が持たないという有様でした。入学試験のときには珍しく家にあった幾粒かのキャラメルを、朝ごはんの代わりに口に入れて、ホッと息をついたりしました。⁷¹

と述べており、藤田のように経済的に恵まれた環境に育った学生であってもかなり厳しい生活を強いられたようである。

藤田は 49 年に大学を卒業後も、お世話になった教授の誘いで助手として大学に残った。しかし、3 年の任期を終えた後、国立国会図書館の調査立法考査局の主事に転任する。

それまで、自分の職業を自ら選び歩んできた、という気持ちがないままに、コンクールでは一等賞をいただき、ピアニストになって、という生活を送ってきた私は、生れて初めて、自分の職業を自らの意志で決めたことになります。⁷²

最終的には昭和 57 年に事務次官相当職である専門調査員にまでなり、多くのメディアの注目するところとなる。これについても藤田は「ただ真面目に働いていただけ」と答えている。なお、藤田は生涯独身を通している。

第 2 節 中根千枝

女性初の東大教授として知られる社会人類学者の中根千枝は、津田塾専門学校を卒業後、1947 年に東大文学部に入学した。彼女は 1969 年 11 月 2 日の『朝日ジャーナル』の中で、大学に「突如放り込まれた異邦人「女性」としての立場から自身の学生生活を回想している⁷³。

中根は、弁護士をしていた父の仕事の都合で中国北京で暮らしていたころから、中央アジアに強い関心を抱いていた。津田塾時代にも本を読みふけり、大学で中央アジアについて勉強したいという強い思いを持って東京大学を志望した。しかし、彼女にとって、東大に行くということは入学試験を受ける 1 年前までは考えも及ばぬことであり、そこは全く

の別世界、好奇心の対象であった。そして、入った時の第一印象を「とても自由で気持ちがよかった」と語る。

興味のある講義だけに出ればいいし、お寝坊の私は、早朝の講義に出なくてもいいというのは素晴らしかった。講義がつまらなければ途中でも教室を出ることができた。つまらない必須単位の講義は1日も出なくても、学年末試験さえ受ければ単位が取れた。研究テーマは自由に選べるし、女の学校では軟派と言われ、先生にたびたびお説教され、困った子だとにらまれていた反逆児の私は、大学では何ひとつ反逆する材料がなかった。男の大学って何て素晴らしいのだろう、と私は自由を満喫するような気がした。

多くの男性に囲まれながら生きいきと学問に取り組む自立した女子学生の姿が浮かんでくるような記述である。しかも、数少ない「女の子」であったため、伝統的なタテ社会（先輩・後輩、教官・学生）のなかに生きる男性たちと同様の厳しい行動パターンは強要されることがなかった。

男子であったなら、教官、先輩に対して直立不動で「ハッ！」なんてかしこまらなければならないときでも、「でも、先生、そんなことおっしゃっても…」などとやわらかく身をおかわすことができた。

「女の子」だと、それほど神経にさわらないらしいのである。第一、みんなとても優しくかった。こうした私などの特権をいち早く感知した男の子など、先生に言いにくいことがあると、よく私を使ったりしたものである。

中根は男性社会の中でしたたかに生きた女子学生であったようだが、男子学生から珍しがられた彼女にとっても男子学生は「不思議な世界の住人たち」であった。特に困ったことは、彼らが好んで使用した用語がよくわからなかったことだという。それらは観念的なものであり、彼らは高等学校時代に修得する。小学校以来、全く別世界で教育を受けてきた女子学生にとって、一種の外国語のようなものであった。中根は、

彼らは、同じように入試を通過し、また学年末試験ともなれば、彼らよりたいいよ

い点をとる私たちのことだから、この私たちのハンディにはほとんど気がついていなかったと思う。

と述べているが、男子学生と論じ合う中で、彼らの使用する用語に大体の察しを付けて相槌を打ちながらももどかしい思いをしたり、男子学生に対して自分が無教養であることにひそかにコンプレックスを抱いていたようである。

中根は、大学で中央アジアの研究に没頭する中で、特にまだ十分な研究がおこなわれていないチベットに興味を抱くようになる。しかし当時は中国からチベットに行くことのできない政治状況であり、修士課程修了後も中根は助手として大学に残る。そして冒頭で述べたように東大初の女性教授となり、30年の時を経て初めてチベットの地を訪れることになる。

第3節 広田寿子

広田は、日本女子大国文科を卒業し、1947年に経済学部に入學した。体が弱く、病気がちな布団の中で、友人に借りたマルクスエンゲルス伝を読みふけり、ぶつけどころのない社会への不満を抱えていたとき、「女子教育刷新要綱」が閣議諒解されたという知らせをきき、「夢が現実になった」と感じたという⁷⁴。この時のことを振り返り、広田は「こうして教育上の徹底的男女差別の、公認から否認への画期的宣言とも言える「女子教育刷新要綱」が日の目をみたことは、私を勇気づけてくれました」と語っている⁷⁵。

1947年度の経済学部の入試は、英文和訳、和文英訳、日本史、西洋史、小論文からなっていた。「大教室の試験場で女は一人。昼食時に心細さもあつてか、数人の女子受験生全員が一塊になりました」という⁷⁶。その試験を突破し、晴れて経済学部の学生になった広田であるが、当時の経済学部は以下のような状況であった。

当時東大経済学部では、戦争の始まる前後に「治安維持法」などの関連で大学を追われた教授たちが続々と復帰し、代わって戦争を謳歌していた教授たちが次々に教壇をはなれていきました⁷⁷

また、広田もほかの女子学生同様、勤労学生であった。普段は進駐軍の家のメイドとして住み込みで働き、夏休み中の9月から、週に1日、労働省の嘱託として働いていた。とは

いえ着るものも十分になく、それを示す一つのエピソードとして下記のようなものがある。

女学校時代のナギナタ授業用の黒木綿の袴をつぶしたズボンをはいていたが、一度銘仙の着物を着て授業に出たことがある。というのは、一足きりの靴に釘がでてはけず、仕方なく下駄をはき、足元に合わせて着物を引っ張り出した⁷⁸

さらに、広田はゼミで出会った学生と、学生結婚をしている。その際、ゼミの教官に仲人を頼んだところ、新聞記者には十分に注意するように言われたという。広田はショックを受けたが、のちに次のように回想している。

しかし、東京大学が当時正式には東京帝国大学と呼ばれていた時代で、新時代の趨勢として敗戦後初めて認めた男女共学は、全くの夜明けにすぎませんでした。したがって、そういう時に学生結婚が表沙汰になれば、新憲法の本質にはお構いなく、案の定、神聖な帝国大学がおかされた、という証拠を提供することにならない保証はありません⁷⁹

新婚生活を初めて間もなく広田は結核を再発し、入院を余儀なくされる。1年留年し、1950年によく復学。広田はその時29歳であった。

進路を決めるにあたり、

1951年3月の経済学部女子卒業予定者は、48年に女子ではたったひとり入学した戸坂さんと、病気で1年留年した私の二人にすぎなかったのですが、逆にいえばそれだけ世間の注目を浴びておらず、就職は雲をつかむような状況にありました。⁸⁰

と回想するように、大卒の女子を採用しようという企業はほとんどなかった。広田は知人の紹介でNHKの採用面接を受けたが、「協会についてどう思うか」という質問に対し、「教会」と勘違いして答えるという大失敗をしたという。広田はこのことを「無防備だった」と言うが⁸¹、それだけ女子学生の就職に関して与えられる情報が少なかったということだろう。

私はいざとなれば、都立高校の夜間の教員になって勉強を続けようと覚悟していたのですが、労働省が労働経済の分析を担当してほしいと言ってくれたので、それならばと労働省の方を選びました。当時は経済職を行政職の両方を受験することができ、2つとも合格しましたが、労働省には経済職で受験しています。経済職で就職した女子公務員は、それまで全国に一人もいなかったはずです。⁸²

こうして広田は役人としての道を歩むこととなった。

第4節 赤松良子

女性の地位向上のために奮闘し、男女雇用機会均等法制定の中核人物となった赤松良子は、1949年、津田塾専門学校を卒業後、旧制最後の入学生として東大法学部に入った。すでに東京大学が女性へ門戸を開放してから数年が過ぎ、津田塾の身近な先輩が東大へ進学していく中、赤松も「アンビション」を燃やしていた。東大への進学を決意したことについて赤松は次のように述べる。

小さいころから専業主婦である母親の姿を見て育って、あんなふうになるのは御免だ、と早くから思っていました。…私は戦前から女性になっていた、医者か弁護士になりたいなどと思ったり、ともかくも世の中に出ていきたいという気持ちが強かったですね。戦後、東京大学の受験が男女公平に開放されたのが進路を決する一つの転機になりました。私の家は学歴を積むことには基本的に賛成らしく、女の子だから学校へ行かなくていい、と言われたことは一回もありません。専門学校を出るとき「大学へ行きたい」と言ったら、「そうか」という具合です。⁸³

「学歴を積む」ことへの反対はないものの、赤松の実家は大阪にあり、当時の東京はまだ食糧難であったし、なにより深刻な住宅難があった。空襲によって多くの住宅が消失し、復員・引き揚げ、疎開からの帰郷、地方からの出稼ぎなどで人口は増加するばかりであったためである。当然、その中で若い女性が一人暮らしをすることは難しかった。下宿をすれば費用はかさむし、なにより女子学生への部屋の提供は少なかった。(津田塾には学寮があった。)赤松は父が知人に頼んで下宿先を見つけてくれたおかげで、東京大学に進学することが可能となったのである。しかし、自分の希望を強行して入った大学で、年若い

た親に頼ることはしたくないと、赤松は国立だから安い学費のみを親に頼るのみで、あとの生活費、本代、小づかいなどは、奨学金と、中学校の英語教師や家庭教師などのアルバイトでまかなった。着るものは母や姉が手作りで用意してくれたという。

そうして入学した東京大学であったが、その年の法学部入学者のうち、女子学生は赤松を含め4人であった。

はじめは、あまりに大勢の男たちで、何が何だか分からなかった。女性は少ないから私たちはよく一緒に行動した。なんでも相談するし、仲が良かった。⁸⁴

と、後に赤松は語る。珍しげに眺められる側の彼女たちであったが、親切にしてくれるボーイフレンドは沢山できたという。(赤松も学生時代のボーイフレンドの一人と卒業と同時に結婚している。) 赤松は、アルバイトと勉強ばかりをしていたわけでもない。大学1年では法律相談所グループの模擬裁判劇に夢中になった。2つのゼミに出席し、「よく学んだ、そしてよく遊びもした」という⁸⁵。

しかし、進路を決める段階になると、1953年の時点で、東大法学部を卒業した女性が、男性と平等にその資格を活かして働ける場所は皆無に等しかったといえる。当時ははじめてから男女の採用基準が区別され、その多く場合が大学卒の女性を男性同様に扱うことを拒否していた。

その点、国家公務員は平等だと思っていた。だって憲法で、男女平等と定めた国の政府なのだから。行政官になるには、国家公務員試験がその第一歩としてある。そこで私は、国家公務員六級職(キャリア)試験を受けて合格した⁸⁶

とは言っても、この年上級職で採用された国家公務員のうち女性はわずか2名。赤松がたまたま労働問題に興味を抱いて労働省を志望していたからよかったものの、労働省は当時女性を採用していた唯一の省庁であった。労働省にはアメリカをモデルにして「婦人少年局」が設置されており、初代から女性が局長を務めた中央官庁で唯一の部署であった⁸⁷。ここには前に登場した広田も所属していた。そして赤松は社会人としての人生を歩み出すわけだが、結婚相手の花見忠とは当時かなり珍しかった夫婦別姓を通し、子どもをお手伝いさんに預けて、前橋、甲府、ニューヨーク、ウルグアイと4回の単身赴任をやったのけ

るという、何から何まで時代の先端をいく生き方をしている。

第 3 章では東京大学を志すところから進路を決定するところまでを、個別に詳しく見ることで、よりリアルな女子学生の姿を浮かび上がらせた。ここには、授業をさぼり、テスト前になると焦り出す現在と変わらぬ女子学生の姿と同時に、貧しさに苦勞した、彼女たちが生きた時代もみえてくる。ここに登場する女性是谁も後の人生で名を挙げた人たちであり、人生の伴侶や夢を在学中に見つけ、その後の人生を職業人として生きた。彼女たちの姿こそが「男女共学」の理想なのかもしれないが、このような人生を送ることができるのはごく限られた人だけではないか、ということも心にとめておかなければならない。

終章

女性に対して門戸が開かれたばかりの東京大学に通った女子学生たちは、強く、真剣に学問を志した。56年卒の樋口恵子が、

いつも心の中をなんとなく本当の意味でわかってくれて、本当の意味で言いあえる先輩がいない。女性同士のいやらしい面も含めて、ばっちり女同士で支えられるという気分について、初期の共学の女子学生というのは、いつもどこかに風が吹き抜けているような飢えた思いがありました。⁸⁸

と語るような思いは、彼女たち皆が多かれ少なかれ抱いていたはずである。しかし、受け入れる側の男子学生とは違い、「男女共学」という新しい環境の中で自らが女性であることを強く意識して、本当に男女共学が実現するとはどういうことかを自分の身で感じ、考えていたのが彼女たちではないだろうか。彼女たちは伝統ある東京大学の実態を誰よりも近くで客観視する存在でもあった。初期の女子学生たちにとってキャンパスライフがなまやさしいものではなかった要因は、男子学生のなかでの心細さだけでなく、衛生施設の不備や経済的な苦しさなど多岐に及んだ。そして、彼女たちにとっての「男女共学」は、自分が東京大学に通っているという事実では決して満たされることがなかったようだ。女子トイレが設置されることだけが彼女たちの求めたゴールではない。彼女たちの声を借りるのならば、「もっとフリーに多面的に異質の人格により練磨し吸収しあう場」⁸⁹が実現されてこそそのものだったのではないだろうか。

東京大学の女子学生がようやく100人に達するのが1964年、200名が80年。ただし、その間に入学定員が激増しているため、比率で言うと女子学生数は漸増したに過ぎない。その比率が10%を超えるのは1987年、実に40年以上の歳月を要した。現在でもマイノリティと言っているほどである。東京大学の公式ホームページには学生全体の「小計」と「女」の項目が併記されている。しかも女は赤字である。「普通は「小計」「男」「女」と併記するもんだらう⁹⁰」というのと言われてみればなるほど、といったところだ。彼女たちが求めた男女共学は現代において、このマイノリティの中にも学業のみならず、サークルの代表者に女子が就くなど、様々な場面で実現されている、と執筆者は感じている。しかし、そのような例がありつつもやはりマイノリティと呼ばざるをえない現状には何か課題が残されているのかもしれない。

また、本文中ではあまり触れることができなかったが、彼女たちのその後を目を向けると、まだまだ社会が女性を受け入れるには時間が必要だったようだ。例えば、第3章で登場した広田寿子が卒業した51年の旧制大学女子卒業生は全国に262人おり、(男子は24097人) そのうちの80%以上が何らかの職に就いているものの、その94%が教育職であり⁹¹、大学が開放されても、女性が働く場はまだまだ少なかった。赤松が労働省に入ったころのエピソードもそれを裏付ける。そしてその状況はすぐに解決するものではなかった。執筆者が東大女子卒業生の同窓会組織であるさつき会の主催するランチ会に出向いた際、50年代後半から60年代に卒業した方にきいた印象深い話がある。彼女は同じく東大に通った男性と結婚し家庭に入ったが、夫の上司が彼女が東大卒の妻であることを知ると「家に呼んでほしい」と夫に言ったそうだ。東大卒の奥さんを見てみたい。料理なんてできるのか、と。また、ある人はそのまま大学で研究を続けることを望んだが、最初から「女はお断り」だったという。女が入ったら優秀な男の席が一つ減るからと。結局彼女は研究者である夫と共にアメリカへわたり、アメリカで学位を取得している。そして、彼女たちは「偉くなてなれなかったけれど、みんなやりたいように生きてるわ」と言う。

またその一方で、社会全体の中において、初期の東大女子学生は、ほかの大学の高学歴女性にとっての一つのモデルであった。「自分が職業を考えていくうえで、上級公務員やジャーナリズムに早くから進出していた東大卒の女性たちは目標になりました⁹²」というように、彼女たちはやはり時代の象徴としての役割も負わざるを得なかったといえるだろう。

本稿の課題、心残りといえば、当時の女子学生へのインタビューが十分に行えなかったことである。新聞や雑誌に記事をよせたり、後に著作を残す女性は、卒業後に社会の中で名を挙げて言った女性が多い。中にはもちろん家庭に入って専業主婦として生きた女性や、定年まで教師を勤め抜いた人、夫の転勤で地を変えながらも様々な職に就いた人、様々なのだ。「普通の」(という言葉が正しいかは分からないが) 学生の声を数多く聞いてみたかった。それから、本論では対象を「東大女子」に限定したため、同時期に共学化した大学に通った女子学生や、世間一般に「男女共学」がどのようにとらえられていたかについて触れることはなかったが、そこまで考えを深めることでまた違った角度から「東大女子」をみることはできたかもしれない。

この研究を通して自分が生きてきた「男女共学」という当たり前の環境は、私自身に対して大きな可能性を与えてくれるものだったのだと、いかに恵まれた環境で学ぶことをしてきたかと実感することができたと感じている。執筆者にとって、「東大女子」という肩書

は、高校時代からの憧れであった。しかし、いざ入学してみると、「大学は？」と尋ねられた時「あ…東京大学です…」と、一瞬躊躇してもごもごと大学名を言うことが多かった。相手が「えっ」と言ったまま反応に困ってしまうこともあれば、「東大の女の子、はじめてみた」と物珍しげに言われることもあった。例えば、アルバイトをする中で、「東大生なのにそんなこともできないの」「東大生は注意しても理屈っぽく返される」「東大生は覚えははやいけどどうも頭でっかちで…」等々、執筆者を含め、周りの友達はこのようなことを言われてきたという。4月から社会にでて働き始めてもそれは続くのかもしれない。それは、執筆者にとって憂鬱なことであった。「東大女子」という目で見られたくない、と。しかし、本稿で取り上げた「パイオニア」たちは、特に社会に出てから現代とは比べ物にならないほどその思いを味わったことだろう。本稿を通じてもうひとつ、考えが変わったことは、この肩書を持って堂々と社会に出ていこう、ということである。同じ肩書を持った大先輩達に恥じぬよう、強く生きていきたい。

1 「迎へる新鋭千余名 未曾有の多彩な入学者」『帝国大学新聞』1946年5月11日付、第1面。

2 昭和24年3月13日、初めての女性卒業生を送り出す卒業式における南原総長の演述より。

3 東京大学ホームページ (http://www.u-tokyo.ac.jp/stu04/e08_02_j.html (2014年1月4日最終情報取得)) より。平成25年5月1日における。なおこれは学部学生の数であり、研究生、聴講生は含まない。

4 2006年に学内に設置された男女共同参画室では、「2020年までに学生の女性比率30%」を目標に掲げ、女子学生が過ごしやすい環境づくりを進めている。

5 林恭子「戦後日本の女子高等教育機会解放と推進に関する一考察—ルルホームズの活動に焦点をあてて」『大学教育学会誌』30巻2号、大学教育学会、2008年、97-105頁。

6 石井留奈「女子大学連盟および日本大学婦人協会の結成と活動—戦後初期における女子高等教育改革の一側面」『桜美林国際学論集』桜美林国際学論 Magis 編集委員会、2002年、15-26頁。

7 高橋恵美子「戦後女子高等教育の目指したもの—新制度の発足と平等観の形成をめぐる—」『生活文化研究』関東学院女子短期大学生活文化研究所、2001年、107-118頁。

8 湯川次義「戦後の旧学制下における女性への大学の門戸開放政策と開放の実態—1946年度の場合を中心として」『早稲田教育評論』第19巻第1号、2005年、11-33頁。

湯川次義「戦後教育改革期における女性の大学教育制度の確立に関する一研究—1946年3月から1947年3月まで」『早稲田教育評論』第20巻第1号、2006年、13-35頁。

9 湯川次義「戦後の旧学制下における女性の大学教育の制度的確立に関する一考察—早稲田大学の対応を中心に」『早稲田大学史記要』早稲田大学大学史資料センター、2013年、7-36頁。

10 厳密にいうと、1947年に「東京大学」に改称している。

11 49年には旧制、新制2本立てで入試が行われ、入学式も別であった。49年に入学した赤松良子は自身が旧制最後の入学生だったことを誇りに感じていたようである。

-
- 12 さつき会編『東大卒の女性—ライフレポート』三省堂、1989年、57-58頁。
- 13 さつき会編『東大卒の女性—ライフレポート』三省堂、1989年、194頁。
- 14 東北帝国大学の初代総長沢柳政太郎は「多数の女子の中には大学教育を受けたいものもいるはずで、それを女だからと拒むには及ばない」という決して積極的ではない理由から女子入学を許可している。こうして日本で初めての女子学生となったのは、黒田チカ、牧田らく、丹下ウメの3名である。
- 15 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 史料』東京大学出版会、1987年 888頁。
- 16 寺崎昌男『プロムナード東京大学史』東京大学出版会、1992年、166頁。
- 17 選科生は、学びたい科目を選択し、受講することができた。科目によっては入学試験を課された。受講学科目の試験を受けることができ、かつ証明書をもらうことができた。(『東京大学百年史 通史2』p248)
- 18 「木村秀子の履歴」『朝日新聞』1887年11月9日、大阪版朝刊、第2面。
- 19 「木村秀子(東京女子専門学校教頭)死去 20歳、女子初の帝大選科生」『読売新聞』1887年11月8日、第4面。
- 20 『婦女新聞』1917年7月6日、第4面。
- 21 「帝大文科の婦人聴講 我国最初の試み 一日から始まる」『読売新聞』1917年8月2日、第4面。
- 22 「赤門日参の記 帝大文科の夏季講座へ女だてらに出席して見て」『読売新聞』1917年8月8日、第4面。
- 23 『東京大学百年史 通史2』東京大学出版会、1987年、247頁。
- 24 当時理学部では東京女子師範学校助教授の保井コノが「囑託」として「年来の研究なる植物の細胞並に解剖の研究」を行っていた。
- 25 「九月の新学期から帝大が婦人に開放 但し聴講生として各科相当の資格を要す」『読売新聞』1920年4月2日、第4面。
- 26 「帝大の婦人聴講生の熱心な態度は明るい将来を期待させる／帝大教授・松本亦太郎」『読売新聞』1920年12月3日、第4面。
- 27 これに対し文学部の教授は「聴講生には試験がない。それだけに一種の虚栄心からくるものがあっても困るから、この際入学の規則を設けて制限してはどうかという説も出ている」と述べている。「帝大の婦人聴講生が学力の不足から 四十六名が十五名に減る」『読売新聞』1922年5月9日朝刊4面。
- 28 「東大婦人聴講生減るばかり」『読売新聞』1927年4月21日朝刊3面。
- 29 「帝大で男女の聴講生お断り 今までのはお払い箱」『読売新聞』、1927年12月17日朝刊第3面。
- 30 広田寿子『女三代の100年』岩波書店、1996年、159頁。
- 31 高野岩三郎「東京帝大の刷新再建の方法」『帝国大学新聞』1945年11月1日第1面。
- 32 『お茶の水大学百年史』1984年、273頁。
- 33 東京大学『東京大学百年史 通史2』東京大学出版会、1987、1000頁。
- 34 湯川次義「戦後教育改革期における女性の大学制度の確立に関する一研究 1946年3月から1947年3月まで」『早稲田教育評論』第20巻第1号、2006年、13-35頁。
- 35 東京大学『東京大学百年史 通史2』東京大学出版会、1987、1000頁。
- 36 東京大学『東京大学百年史 通史2』東京大学出版会、1987、1001頁。
- 37 湯川次義「戦後教育改革期における女性の大学制度の確立に関する一研究 1946年3月から1947年3月まで」『早稲田教育評論』第20巻第1号、2006年、13-35頁。
- 38 東京大学『東京大学歴代総長式辞告辞集』1997年、251頁。
- 39 南原総長は女子学生のことを気かけ、たびたび直接話をする機会を設け、また女子の第1期生である藤田晴子には、行事のたびにピアノの演奏を依頼したという。この入学式

の1年後に女子学生と懇談した際には「学課だけの学問だけでなく、自分から進んで教養を高め、婦人としての気品を養ってほしい」と語っている。（「総長と懇談 軍女子学生」『帝国大学新聞』1947年3月5日第1面）

40 「迎える新鋭千余名 未曾有の多彩な入学者」『帝国大学新聞』1946年5月11日第1面。

41 男子学生には名前に君付けをしているのに対し、女子には一言「女子学生」だけである。これはあまりにも女子が少ないため、名前を出すとすぐに特定できてしまうことを考慮してのことだろうか。

42 「入学式 総長演述の印象」『帝国大学新聞』1948年4月15日付、第1面。

43 野見恭介「クラスメートとしての女子学生—現代女子学生の可能性」『婦人画報』東京社、1947年3月1日、14-15頁。

44 野見恭介「クラスメートとしての女子学生—現代女子学生の可能性」『婦人画報』東京社、1947年3月1日、14-15頁。

45 「男子学生の生活を見る—女子学生の立場から— 女子学生の生活を見る—男子学生の立場から—」『芸苑』巖松堂書店 1949年2月、20頁。

46 久松潜一「女子大学生について」『芸苑』巖松堂書店、1949年2月、16頁。

47 公孫樹生「女子学生の実態：東大を中心にして」『学生時代』受験之友社、1947年10月14-15頁。

48 「1箇月後の新入生感想—欲しい人間的結びつき」『帝国大学新聞』1946年6月11日、第1面。

49 「新入生は嘆く」『帝国大学新聞』1947年4月16日第1面。

50 「激戦のあとを辿る」『帝国大学新聞』1947年3月9日第1面。

51 「男子学生へ痛い批判 女子学生懇談会」『帝国大学新聞』1946年6月11日、1面。

52 さつき会編『さつき2』1996年、11頁。

53 「女子学生 光葉会」『帝国大学新聞』1947年5月1日第1面。

54 「ピクニックにも行けぬ悩み—光葉会」『帝国大学新聞』1946年10月9日付第1面。

55 「ピクニックにも行けぬ悩み—光葉会」『帝国大学新聞』1946年10月9日付第1面。

56 「軍学徒の立場から」『帝国大学新聞』1948年2月26日、第1面。

57 女子学生のアルバイトに関しては、「東大にはいま77名の女子学生がいる、1年生38名2年生20名、3年生19名でこのうち3年生は100%アルバイトを持ち、2年生は50-60%、1年生はずっと少なく10-20%である。」というデータもある。アルバイトの内容としては、家庭教師や通訳、軽作業など。なかには夜行列車で東京・大阪間を定期的に往復し、商品見本の運搬役をするものもあった。一方男子学生は、死体処理や、極端なものだと血液を売るなど割のいい仕事に就くものも多かった。

58 「男女共学への反省」『婦人公論』1947年、第361号、中央公論社、52-53頁。

59 「大学生活1年 軍・女子学徒にきく」『帝国大学新聞』1947年3月5日、第1面。

60 「大学生活1年 軍・女子学徒にきく」『帝国大学新聞』1947年3月5日、第1面。

61 「大学生活1年 軍・女子学徒にきく」『帝国大学新聞』1947年3月5日、第1面。

62 「大学生活1年 軍・女子学徒にきく」『帝国大学新聞』1947年3月5日、第1面。

63 「迎える新鋭千余名 未曾有の多彩な入学者」『帝国大学新聞』1946年5月1日、第1面。

64 藤田晴子『ピアノとピアノ音楽』音楽之友社、2008年42頁。

65 藤田晴子『ピアノとピアノ音楽』音楽之友社、2008年43頁。

66 藤田晴子『ピアノとピアノ音楽』音楽之友社、2008年43頁。

67 執筆者が聞き取りを行った、48年に法学部に入学した女性も同様の理由で学部を選んでいる。

68 藤田晴子『ピアノとピアノ音楽』音楽の友社、2008年51-52頁。

-
- 69 藤田晴子『ピアノとピアノ音楽』音楽の友社、2008年48頁。
- 70 藤田晴子『ピアノとピアノ音楽』音楽の友社、2008年48頁。
- 71 藤田晴子『ピアノとピアノ音楽』音楽の友社、2008年61頁。
- 72 清水高「あの人を訪ねたい 中根千枝」『石垣』通号378、日本商工会議所、2011年8・10頁。
- 73 中根千枝「激動の大学、戦後の証言-5- ふしぎな世界の住人達」『朝日ジャーナル』朝日新聞社編11、1969年、96・101頁。この記事は全体として当時、世間的に「エリート」「特権階級」と呼ばれた学者や知識人の生きた大学という「象牙の塔」を批判的に論じるものである。
- 74 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996年159頁。
- 75 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996年159頁。
- 76 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996年166頁。
- 77 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996年169頁。
- 78 金森トシエ、藤井治枝『女の教育100年』三省堂、1979年128頁。
- 79 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996年179頁。
- 80 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996年204頁。
- 81 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996年204頁。
- 82 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996年205頁。
- 83 赤松良子「先輩たちに憧れ、草分けの一員に」『時評』42号、時評社、2000年121頁。
- 84 赤松良子『志は高く』日本図書センター、2001年50頁。
- 85 赤松良子『志は高く』日本図書センター、2001年51頁。
- 86 赤松良子『志は高く』日本図書センター、2001年51頁。
- 87 女性局長は、初代・山川菊代、2代・藤田たき、3代・谷野せつ、4代・高橋展子、5代・森山真弓、6代・高橋久子、7代・赤松良子と続く。5代から7代はすべて東大卒の女性官僚である。
- 88 『日本婦人問題懇話会会報』（53）日本婦人問題懇話会、1993年81頁。
- 89 「女子学徒の立場から」『帝国大学新聞』1948年2月19日、第1面。
- 90 中本千晶『東大卒でスママセン―「学歴ありすぎコンプレックス」という病』中央公論新社、2012年158頁。
- 91 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996年203頁。
- 92 竹信三恵子「東大女子学生「学歴社会の鬼っこ」を生きて」『朝日ジャーナル』1983年7月8日、33頁。

【参考文献】

- ・赤松良子『志は高く』日本図書センター、2001年
- ・赤松良子「先輩たちに憧れ、草分けの一員に」『時評』42号、時評社、2000年121頁
- ・石井留奈「女子大学連盟および日本太学婦人協会の結成と活動―戦後初期における女子高等教育改革の一側面」『桜美林国際学論集』桜美林国際学論 Magis 編集委員会、2002年、15-26頁
- ・お茶の水大学『お茶の水大学百年史』1984年
- ・金森トシエ、藤井治枝『女の教育100年』三省堂、1979年
- ・公孫樹生「女子学生の実態：東大を中心にして」『学生時代』受験之友社、1947年10月14-15頁
- ・さつき会編『さつき』1986年
- ・さつき会編『さつき2』1996年
- ・さつき会編『さつき3』2001年
- ・さつき会編『東大卒の女性―ライフリポート』三省堂、1989年
- ・清水高「あの人を訪ねたい 中根千枝」『石垣』通号378、日本商工会議所、2011年
- ・高橋恵美子「戦後女子高等教育の目指したもの―新制度の発足と平等観の形成をめぐって」『生活文化研究』関東学院女子短期大学生活文化研究所、2001年、107-118頁
- ・竹信三恵子「東大女子学生「学歴社会の鬼っこ」を生きて」『朝日ジャーナル』1983年
- ・寺崎昌男『プロムナード東京大学史』東京大学出版会、1992年
- ・東京大学『東京大学百年史』1987年
- ・東京大学『東京大学歴代総長式辞告辞集』1997年
- ・中根千枝「激動の大学、戦後の証言―5― ふしぎな世界の住人達」『朝日ジャーナル』朝日新聞社編11、1969年
- ・中本千晶『東大卒でスミマセン―「学歴ありすぎコンプレックス」という病』中央公論社、2012年
- ・日本婦人問題懇話会『日本婦人問題懇話会会報』（53）日本婦人問題懇話会、1993年81頁
- ・野見恭介「クラスメートとしての女子学生―現代女子学生の可能性」『婦人画報』東京社、1947年3月1日、14-15頁
- ・林恭子「戦後日本の女子高等教育機会解放と推進に関する一考察―ルルホームズの活動に焦点をあてて」『大学教育学会誌』30巻2号、大学教育学会、2008年、97-105頁
- ・久松潜一「女子大学生について」「男子学生の生活を見る―女子学生の立場から― 女子学生の生活を見る―男子学生の立場から―」『芸苑』巖松堂書店、1949年2月、16、20頁

- ・ 広田寿子『女三代の百年』岩波書店、1996 年
- ・ 藤田晴子『ピアノとピアノ音楽』音楽之友社、2008 年
- ・ 湯川次義「戦後教育改革期における女性の大学制度の確立に関する一研究 1946 年 3 月から 1947 年 3 月まで」『早稲田教育評論』第 20 巻第 1 号、2006 年
「戦後教育改革期における女性の大学制度の確立に関する一研究 1946 年 3 月から 1947 年 3 月まで」『早稲田教育評論』第 20 巻第 1 号、2006 年
「戦後の旧学制下における女性の大学教育の制度的確立に関する一考察—早稲田大学の対応を中心に」『早稲田大学史記要』早稲田大学大学史資料センター、2013 年

【新聞資料等】

- ・ 「木村秀子の履歴」『朝日新聞』1887 年 11 月 9 日、大阪版朝刊、第 2 面
- ・ 高野岩三郎「東京帝大の刷新再建の方法」『帝国大学新聞』1945 年 11 月 1 日第 1 面
- ・ 「迎へる新鋭千余名 未曾有の多彩な入学者」『帝国大学新聞』1946 年 5 月 11 日付、第 1 面
- ・ 「1 箇月後の新入生感想—欲しい人間的結びつき」『帝国大学新聞』1946 年 6 月 11 日、第 1 面
- ・ 「男子学生へ痛い批判 女子学生懇談会」『帝国大学新聞』1946 年 6 月 11 日、1 面
- ・ 「ピクニックにも行けぬ悩み—光葉会」『帝国大学新聞』1946 年 10 月 9 日付第 1 面
- ・ 「大学生活 1 年 軍・女子学徒にきく」『帝国大学新聞』1947 年 3 月 5 日、第 1 面
- ・ 「総長と懇談 軍女子学生」『帝国大学新聞』1947 年 3 月 5 日第 1 面
- ・ 「激戦のあとを辿る」『帝国大学新聞』1947 年 3 月 9 日第 1 面
- ・ 「新入生は嘆く」『帝国大学新聞』1947 年 4 月 16 日第 1 面
- ・ 「女子学生 光葉会」『帝国大学新聞』1947 年 5 月 1 日第 1 面
- ・ 「女子学徒の立場から」『帝国大学新聞』1948 年 2 月 19 日、第 1 面
- ・ 「軍学徒の立場から」『帝国大学新聞』1948 年 2 月 26 日、第 1 面
- ・ 「入学式 総長演述の印象」『帝国大学新聞』1948 年 4 月 15 日付、第 1 面
- ・ 『婦女新聞』1917 年 7 月 6 日、第 4 面。
- ・ 「男女共学への反省」『婦人公論』1947 年、第 361 号、中央公論社、52-53 頁
- ・ 「木村秀子（東京女子専門学校教頭）死去 20 歳、女子初の帝大選科生」『読売新聞』1887 年 11 月 8 日、第 4 面
- ・ 「帝大文科の婦人聴講 我国最初の試み 一日から始まる」『読売新聞』1917 年 8 月 2 日、第 4 面
- ・ 「赤門日参の記 帝大文科の夏季講座へ女だてらに出席して見て」『読売新聞』1917 年 8 月 8 日、第 4 面
- ・ 「帝大の婦人聴講生の熱心な態度は明るい将来を期待させる／帝大教授・松本亦太郎」『読売新聞』1920 年 12 月 3 日、第 4 面

・「帝大の婦人聴講生が学力の不足から 四十六名が十五名に減る」『読売新聞』1922 年 5 月 9 日朝刊 4 面

・「東大婦人聴講生減るばかり」『読売新聞』1927 年 4 月 21 日朝刊 3 面

・「帝大で男女の聴講生お断り 今までのはお払い箱」『読売新聞』、1927 年 12 月 17 日朝刊第 3 面

謝辞

本論文を完成させるにあたり、丁寧かつ熱心にご指導くださった小国喜弘先生をはじめ、ご協力くださった方々に、この場をかりて深い感謝の意を示したいと思います。

インタビューにご協力くださった増永京子氏、直接の引用はできなかったものの、本論の方向性、イメージをつくるうえで不可欠なものであり、また個人的な興味の上でも大変貴重なお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

エッセイ集や会報を送ってくださった鈴木美和子氏をはじめ、さつきサロンでお話を聞かせていただいたさつき会の方々、ありがとうございました。さつき会の残してくださっているエッセイが本論のきっかけでもあります。先輩方のリアルな声を知ることができました。

そして突然の来訪にも関わらず丁寧に対応してくださった東京大学卒業生室の方々、ホームカミングデーの際にお話を聞かせてくださった教育学部 OB のの方々、心より感謝申し上げます。

最後に、東京大学にどうしても行きたいと言った私に、がんばりなさいと応援してくれ、自由な学生生活を支えてくれた両親に、感謝します。本当にありがとうございました。